

共同住宅建設に伴う
鬼虎川遺跡第67次発掘調査報告

2013. 3

東大阪市教育委員会

共同住宅建設に伴う
鬼虎川遺跡第67次発掘調査報告

2013. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

東大阪市内には、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。今回報告します鬼虎川遺跡もその一つです。鬼虎川遺跡は、弥生時代の集落跡として著名であり、銅鐸、銅鉶、銅劍、銅鑓の鋳型が見つかり、青銅製品を製造していた生産遺跡であることが確認されています。

今回の調査では、弥生時代の溝や土坑がみつかり、その時代に伴う遺物も多数発見されました。既往の調査成果に新たに知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、鬼虎川遺跡の解明に大きく寄与できたものといえます。

これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけではなく、地域の文化財学習資料として広く市民の方々にお読みいただくことを願っております。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、大阪府教育委員会をはじめ関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成25年3月

東大阪市教育委員会

目 次

はしがき

目次・例言

I 調査にいたる経過	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の方法と成果	5
IV 出土遺物	17
V まとめ	25

図版

例 言

- 1 本書は、株式会社フジヒサFJが計画した共同住宅建設に伴う鬼虎川遺跡第67次発掘調査の概要報告書である。
- 2 現地における発掘調査は、「共同住宅建設に伴う鬼虎川遺跡第67次発掘調査に関する協定書」第6条の規定に基づき、東大阪市の監理のもと株式会社島田組が実施した。
- 3 発掘調査、遺物整理および報告書にかかる費用は、全額株式会社フジヒサFJが用意・負担した。
- 4 発掘調査は、平成24年2月14日から同年3月17日まで行った。遺物整理及び報告書作成業務は、平成25年3月31日まで行った。
- 5 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2008年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 6 本書の執筆は、Iを菅原、その他は奈良が行った。編集は、奈良が担当した。
- 7 考古学用語については、佐原真・田中琢2002『日本考古学事典』の表記に従った。
- 8 調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は文化庁文化財部記念物課監修2010『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編一』に基づき、以下のものを使用した。

S P	ピット・柱穴	S D	溝・濠・溝状造構
S K	土坑	S E	井戸
S X	その他の遺構	N R	自然流路

- 9 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。(敬称略)

大阪府教育委員会文化財保護課、株式会社サクセス・ブリッジ

I 調査にいたる経過

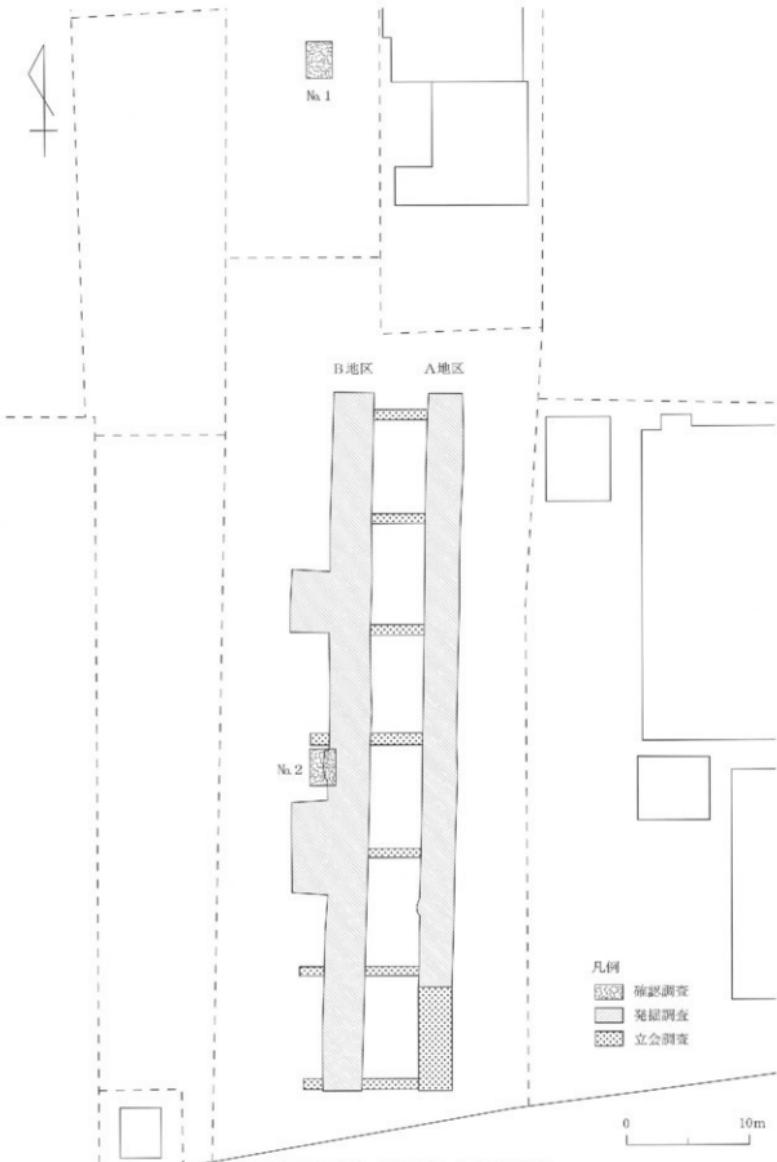
鬼虎川遺跡は、旧石器時代から江戸時代にわたる集落跡である。特に弥生時代中期の拠点集落として周知され、1975年以降、60次を超える発掘調査が行われている。

平成23年12月2日付けをもって、株式会社フジヒサFJから弥生町1399番1、1397番1、1397番2において「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建築工事は杭基礎工事を伴うもので埋蔵文化財への影響が考えられた。当該開発区域は平成15年4月に実施した確認調査によってGL-0.55mより弥生時代の遺物包含層を確認していたため、発掘調査が必要である旨、届出者に通知した。協議を重ねた結果、事前の発掘調査を実施することで双方合意し、平成23年12月7日付で埋蔵文化財発掘調査依頼書が届出者から提出された。

東大阪市教育委員会では発掘調査の取り扱いについて大阪府教育委員会と協議を行った。その結果、協議書を締結して発掘調査を実施することとした。協議書は、「共同住宅建設に伴う鬼虎川遺跡第67次発掘調査に関する協定書」とし、東大阪市・株式会社フジヒサFJ・株式会社島田組の三者で、平成24年2月14日をもって締結した。協定書の規定に基づき、東大阪市（東大阪市教育委員会）の監理のもと、株式会社島田組が発掘調査を実施した。調査期間は、平成24年2月14日から平成24年3月17日までである。調査対象は埋蔵文化財が損壊を受ける2箇所（A地区・B地区）とし、計381m²となつた（第2図）。



第1図 調査位置図



第2図 確認調査・発掘調査・立会調査箇所

II 遺跡の位置と環境

鬼虎川遺跡（以下、当遺跡と略す。）は、生駒山西麓の標高4～10mの扇状地末端部から沖積平野にかけて広がり、現在の東大阪市弥生町・西石切町・笠町・新町一帯に位置する旧石器時代から江戸時代にかけての集落跡である。

当遺跡は、現状では旧古田川の後背湿地に立地し、表層は泥質堆積物が卓越する。西側は、河内湾の汀線にあたり、第25次調査では縄文海進に伴う海食崖を検出している。

当遺跡は、これまで東大阪市・財団法人東大阪市文化財協会・大阪府教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センターによって調査が行われている（第3図）。以下時代順にこれまでの成果について振り返る。

旧石器時代の遺物としてはナイフ形石器が出土しているが、縄文土器と併存しており、明確な旧石器時代の痕跡は今のところ発見されていない。

縄文時代としては、草創期の有舌尖頭器、前期の北白川下層Ⅱ式～大歳山式の土器、中期の船元式が出土している。

晩期の土器が比較的多数出土しているが明確な造構はなく、不明な点が多い。ただ、今回の調査により滋賀型IV式のピットが発見され、縄文時代の集落に関する新たな知見を得ることができた。

縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけては、遺跡の西側において貝塚が検出されている。弥生時代前期の集落域は判然としていないが溝は遺跡の中央部で確認されており、中央部一帯が集落域であったと考えられる。

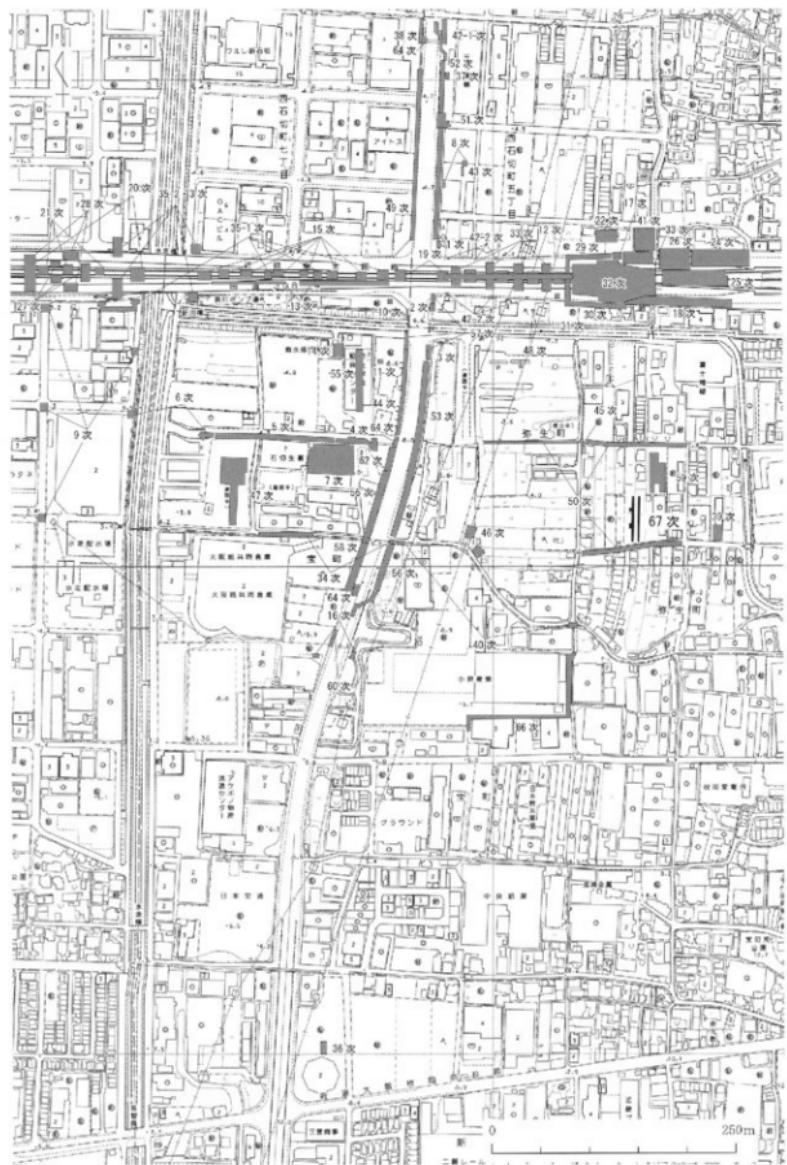
中期前半には鋳造関係遺物が第7次・第62次調査において発見されており、付近が青銅製品の生産遺跡であることが判明している。また、北東側では方形周溝墓が造営されており、墓域として機能していた様子がうかがえる。居住域と墓域の間には数条の溝が走行しており、地形に沿って東西方向に軸を持つ自然河川とを組み合わせることによって区分されている様子が復元できる。

中期後半になると土器の出土は多いが明瞭な造構は、当遺跡の東側で検出されるようになる。これは、東側に位置する西ノ辻遺跡で大規模な集落が営まれており、東側へと集落の中心が移っていったことを物語っている。

後期になるとそれまで多くの土器が出土していたが、当該時期の土器はほとんど見られなくなる。当遺跡での集落は廃絶し、周辺に所在する西ノ辻遺跡や鬼塚遺跡といった東側へとその中心は移っていった。

古墳時代中期になると、小規模な集落が営まれており、竪穴迷路内から滑石製品が出土している。

古墳時代後期以降は、溝や自然河川といった耕作に関わる造構が多くを占め、一帯は耕作地へと変化したと考えられる。



第3図 各次数調査位置図

III 調査の方法と成果

1 調査の方法

調査の方法は、文化庁文化財部記念物課監修2010『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編／整理・報告書編一』に則った。調査区は、建物基礎の入る部分の2箇所に設定した。3m×58mのトレンチを設定し、東側をA地区、西側をB地区とした。出土遺物の取り上げは、遺構を基本の単位としているが、包含層に関しては世界測地系を基準として5m×5mの単位で行った。取り上げ地区に関しては、第4図のとおりである。取り上げた遺物には、マイラーベースの現場取り上げ用ラベル（遺跡名・次数、地区名、層位名、遺構名、出土年月日、登録番号）を付している。登録番号は、今回の調査で1からの通し番号であり、地区を横断している。

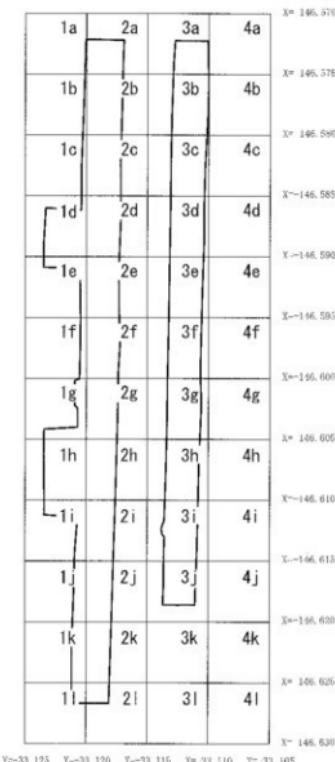
既往の調査によって、弥生時代中期の集落跡として知られており、今回の調査区は第59次調査の南にあることから、これらとの関連が問題として意識された。

調査は、盛土と旧耕作土までを機械によって掘削し、基本的に第3層以下を人力によって掘削を行った。遺構の平面実測は平板で行い、必要に応じて各遺構平面図・断面図・出土状況図を作成した。

調査における写真撮影には、35mm黑白フィルムとカラーリーパーサルフィルムによる撮影を行い、デジタルカメラを補助的に使用した。これらのフィルムは、アルバムに収納した。

出土遺物は、取り上げ後、室内にて遺物を洗浄し、「KTR67-登録番号」で注記を行った。注記した遺物から、遺構出土遺物を中心に接合、復元を行った。接合・復元した遺物の中から報告書に掲載する遺物を抽出し、セクションペーパーに原寸で実測を行った。写真図版に掲載する遺物は、石膏復元や色塗りを行い、写真撮影を行った。

遺構・遺物の図版作成は、Adobe社のIllustratorCS3を使用した。報告書本文を作成、編集し、本書の刊行をもってすべての作業を終了した。



第4図 調査区画

2 層序（第5～9図）

今回の調査では、盛土・第1層を除去した直下に古代～中世の耕作土層が広がっていた。これは、中世以降の耕作に伴う削平によるものと考えられる。

第1層：盛土。

第2層：暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土。旧耕作土。

第3層：黒褐色（10YR3/1）細礫混じり土。古墳時代～中世の耕作土層。

第3a層：褐灰色（7.5YR5/1）粗砂混じり粘質土。弥生～古墳時代の土壤化層。NR001とSD001の上部にのみ堆積している。本来は広く堆積していたが、上部の耕作に伴って削半されたと考えられる。

第3b層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。

第4層：褐灰色（10YR4/1）粗砂混じり粘質土。第II面として面的な調査をおこなった。

第5層：褐色（7.5YR4/4）粗砂混じり粘質土。暗褐色（10YR3/3）土が偽礫として混じる。

第6層：褐色（10YR4/1）粘質土。基盤層。

第7層：黒色（2.5Y2/1）粘土。

第8層：灰褐色（7.5YR4/1）粘質土。

3 調査成果

A地区

第I面

調査当初は、第3層を近世の耕作土層と認識していたためA地区では第3層まで機械掘削を行った。しかし、断面観察と出土遺物の検討の結果、第3層から須恵器の破片が出土しており、古墳時代～中世の耕作土層であることが判明した。上記の理由により、A地区では第I面の調査を行っていない。

第II面（第10図 図版1～3）

第4層下面を第II面として調査をおこなった。上述したように、第I面を検出していないことから複数時期の造構を同一面で検出している。

NR001

B地区でも検出しており、一連の造構として報告する。最大幅は2.7m、深さは0.7mを測る。出土遺物は、壺（5）・甕（6・7）である。出土した遺物はいずれも弥生時代中期後半であり、当該時期に機能していたと考えられる。

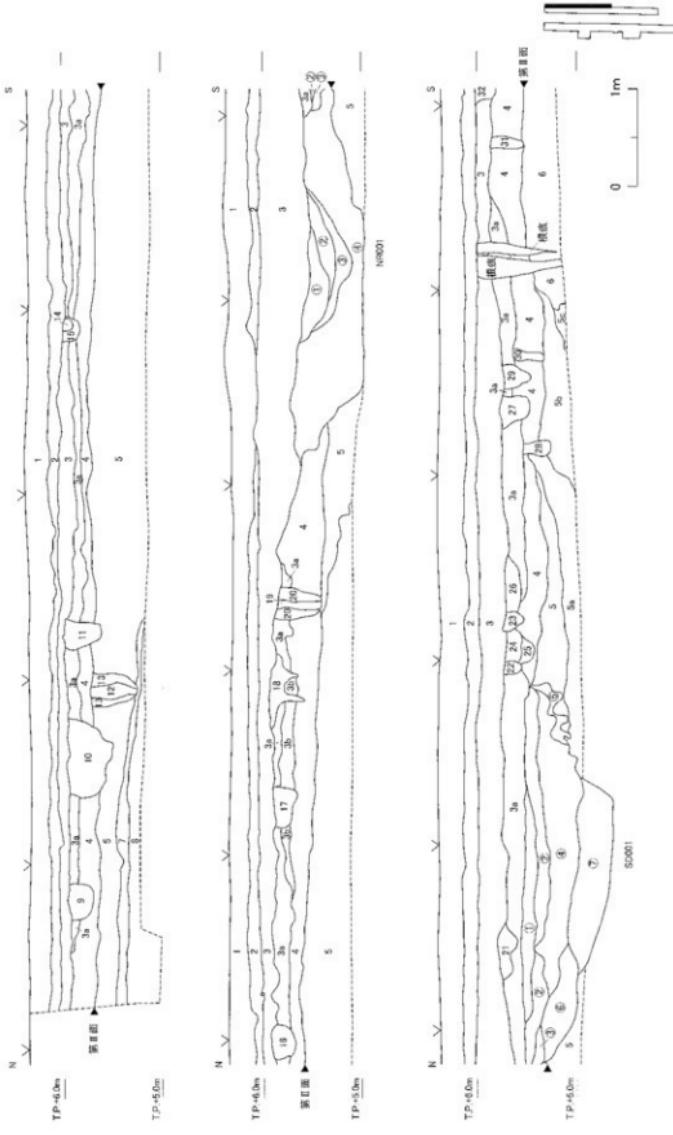
SP001

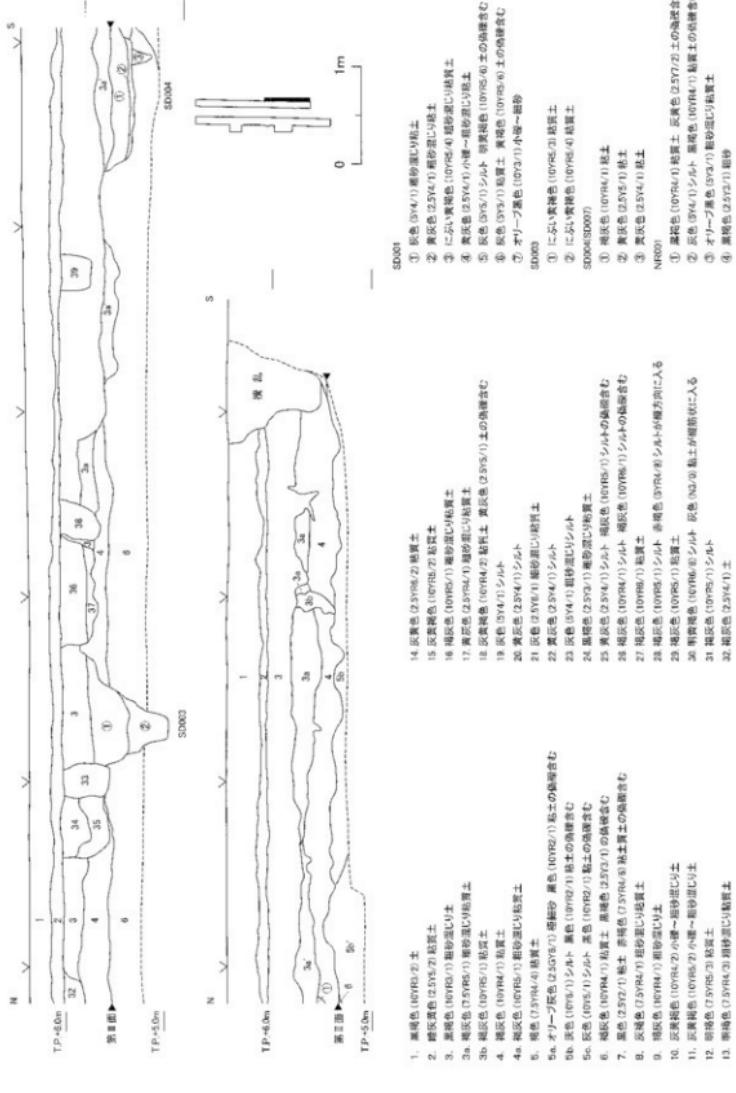
検出状況で長軸43cm、短軸24cmを測る橢円形を呈するピットである。第4層をかなり削り込んで検出しているため下部のみの検出で、本来の形状は断面台形を呈しており、上部は広がっていたと考えられる。柱穴の可能性も考えられるが、対となる柱穴を検出しておらず、ここでは土坑と考えておきたい。埋土からは弥生時代の甕（8～10）・甕（11）が出土した。弥生時代中期後半である。

SP002

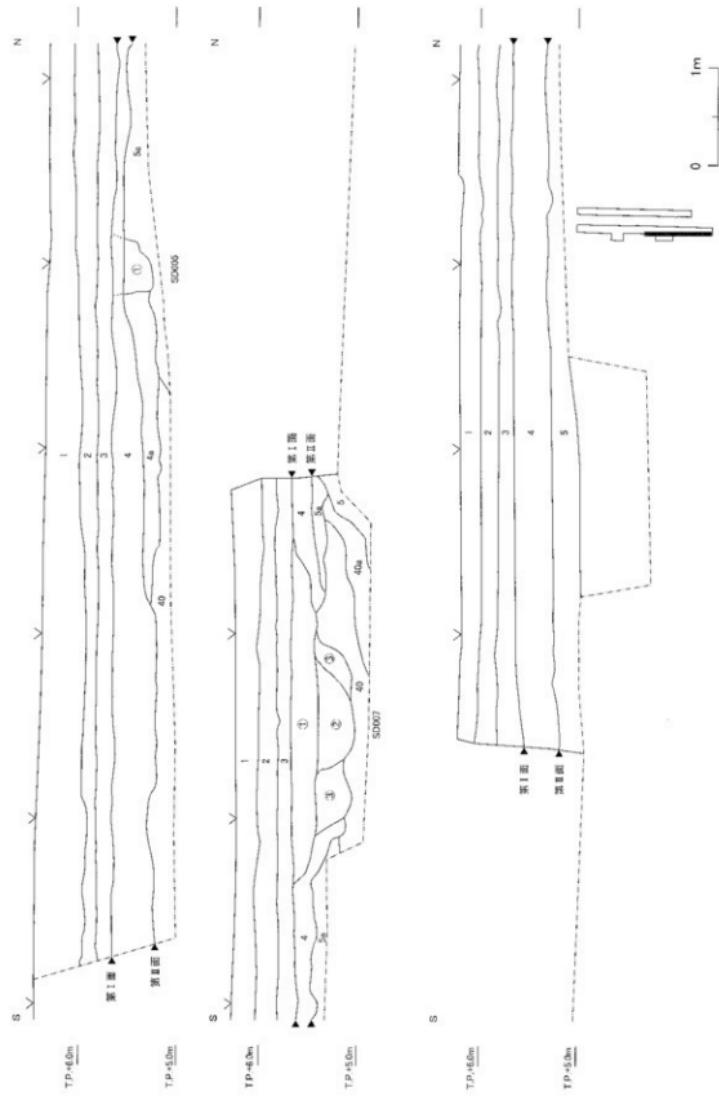
直径約30cmのピットである。SD004に切られ、SP003を切っている。埋土からは縄文上器の口縁部（27）が出土した。接合の結果、第3層として取り上げた遺物の中に接合する体部と同一個体と考えられる底部が発見できた。断定はできないが口縁部を横に向けて配置した埋設上器造構であった可能性がある。縄文時代晩期後葉。

第5図 A地区東側断面図





第6図 △地×東壁断面図2



第7圖 B地區西點斷面圖

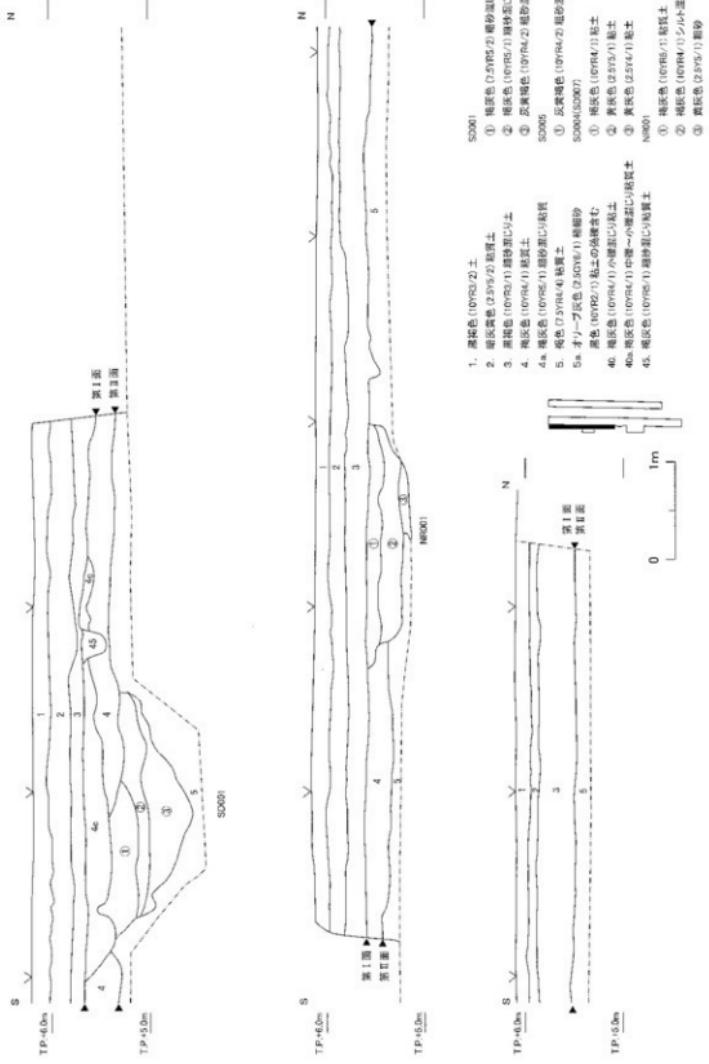
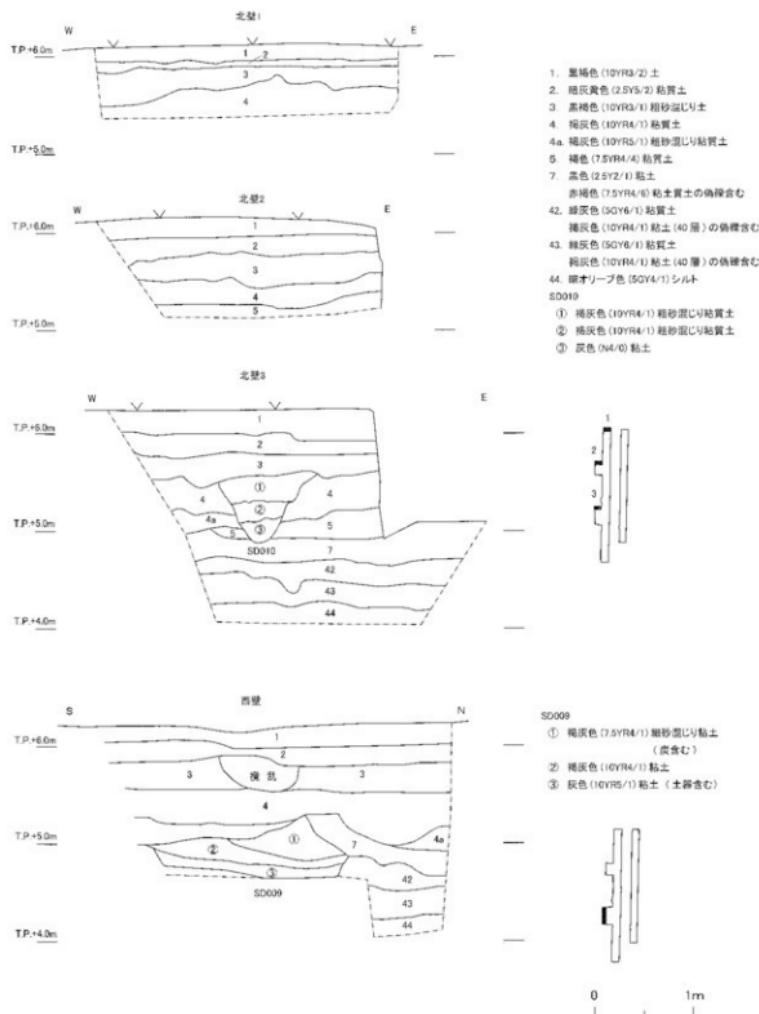


图 8 国 B 地区西侧断面图 2



第9図 B地区北・西断面図

SP003

直径約25cmのピットである。深さは、5cmと浅い。出土遺物なし。

SD001

検出した最大幅で3.6mを測り、深さは0.72mを有する溝である。B地区でも検出しており、東西に伸びる溝である。出土遺物は、壺(48・50・53)・甕(49)・高杯(52)・底部(51)である。時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

SD002

調査区の端にあるため全形は不明であるが、検出した状況で長さ44cm、幅25cm、深さ5cmを測る。遺物は出土していない。

SD003

幅50cm、深さ46cmを測り、断面形はV字を呈する。埋土からは弥生土器の破片が出土した。小片のため図化していないがⅢ様式の壺が出土しており、弥生時代中期後半の所産と考えられる。

SD004

幅1.4m、深さ0.3mを測る。B地区で検出したSD007と一連の溝と考えられる。埋土からは、壺底部(26)が出土した。図化できたものは少ないが、B地区SD007として取り上げた遺物は弥生時代中期半ばの様相を呈しており、機能時期は弥生時代中期半ばである。

B地区（第10・11図 図版4～7）

第4層上面を第I面、第4層下面を第II面として調査を行った。

第I面

SP008

直径約25cm、深さ26cmを測る。小片のため詳細な時期は不明であるが弥生土器片が出土した。

SP012

長軸68cm、短軸39cmの楕円形を呈したピットである。深さ6cmを測る。弥生土器と思われる破片が出土した。

SK005・SD008

当初、SD008は第II面に帰属する造構と考えていたが、断面観察の結果、SK005と同一の造構と判明した。そのため、ここではSK005・SD008として報告する。検出した状況で、幅47cm、深さ38cmを測る。埋土は、褐灰色粘土と黒褐色粘土からなる。褐灰色粘土からは、高杯(40)が出土した。弥生時代中期後半。

SK006

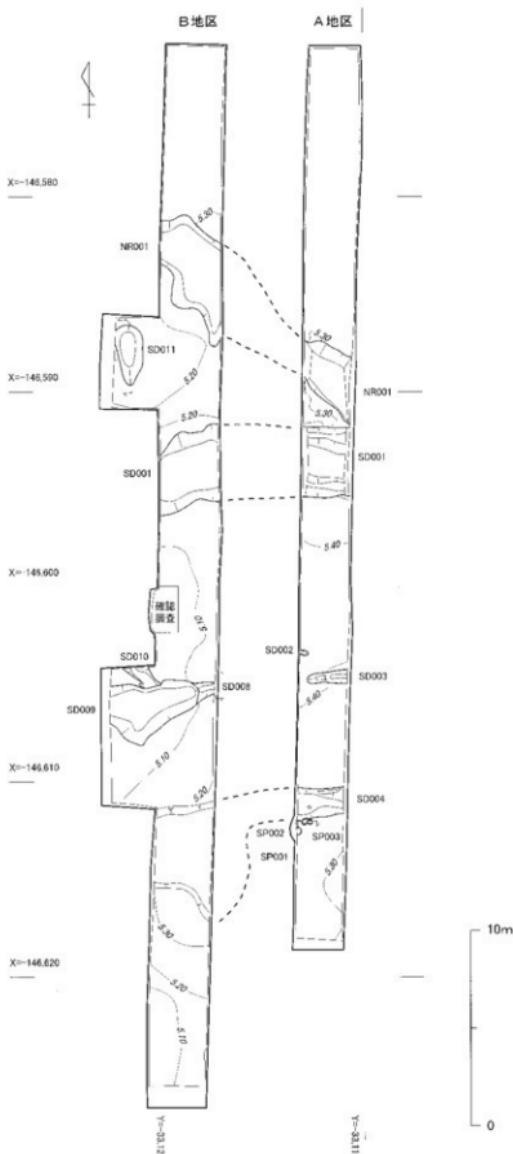
長軸1.5m、短軸0.66mを測る。深さは0.22mで埋土は2層に分層できる。Ⅲ様式と考えられる底部片が出土した。

SD005

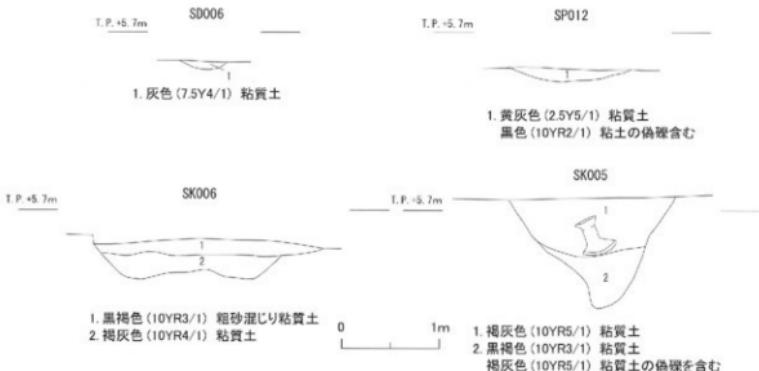
東西に軸を持つ溝で幅61cm、深さ60cmを有する。縄文土器と弥生土器が出土した。図化した土器は、縄文時代晩期と弥生時代前期であるが、小片のため図化していない土器には、様式の土器が認められることから、機能時期は弥生時代中期後半である。

SD006

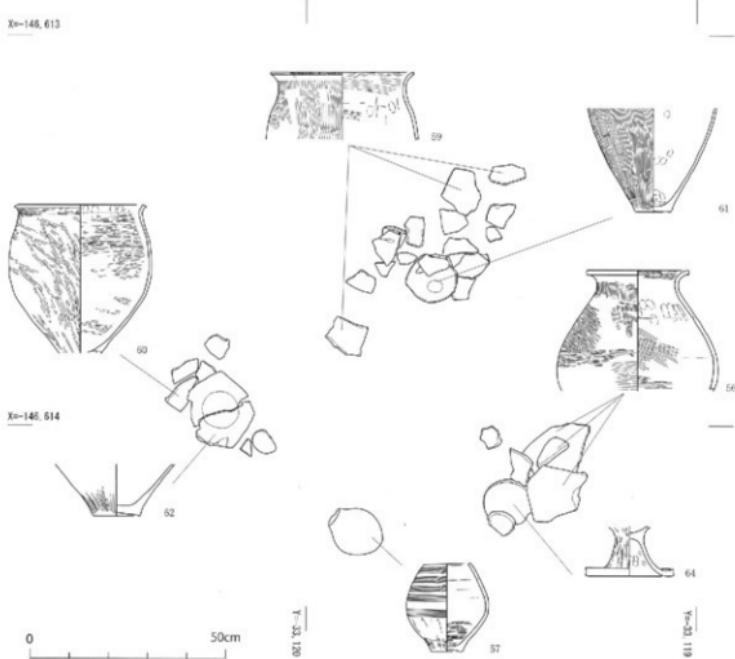
南北に主軸を持つ溝で幅26cm、深さは5cmを有する。出土遺物なし。



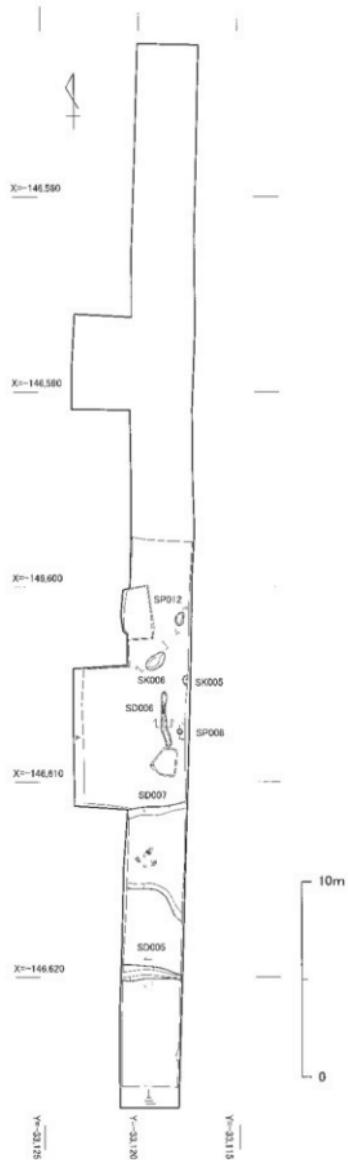
第10図 A・B地区第Ⅱ面平面図



第11図 B地区第I面造構断面図



第12図 SD007出土状況図



第13図 B地区第I面平面図

SD007（第12図）

検出状況で幅3.5m、深さ0.65mを測る。A地区で検出したSD004と同一の遺構と考えられる。A地区では船が狭かったが、B地区ではかなり幅が広がっている。上層で土器が多く出土しており、いずれも廃棄されたものと考えられる。壺（54～57）・甕（58～62）・鉢（63）・高杯（64）が出土した。弥生時代中期後半である。

第II面

SD009

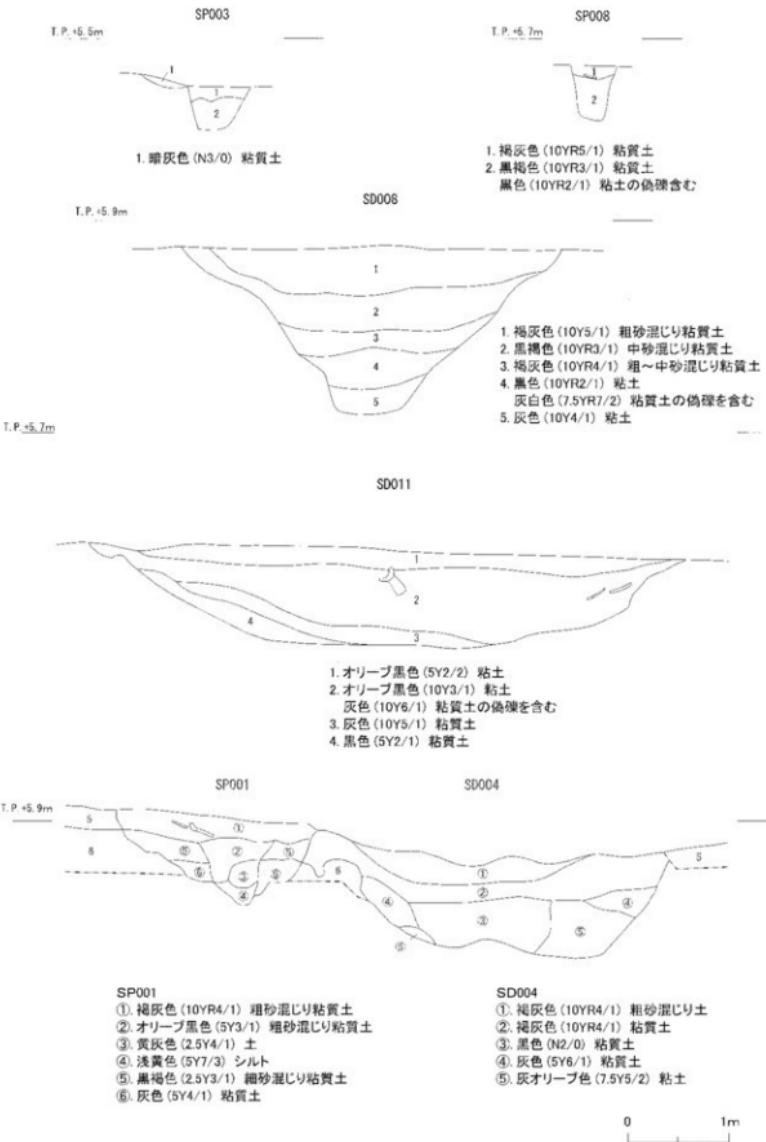
幅約2m、深さ0.58mを測り、東西に軸を持つ溝である。埋上からは、弥生土器（41～44）・古式土師器（45）・動物遺体（歯）が出土した。古式土師器は、①層からの出土である。機能時期は、弥生時代中期後半であり、埋没後窪みとなった場所に古式土師器や動物遺体を廃棄したものと考える。

SD010

SD009に切られ、幅81cm、深さ18cmを測る。

SD011

長軸3m、短軸1.25m、深さ0.68mを測る十坑である。埋土は4層に分かれ、2層からは弥生土器が出土した。出土した土器には高杯（65）、水差形土器（66）が出土しており、弥生時代中期後半と考えられる。



第14図 A・B地区第II面造構断面図

IV 出土遺物

A地区 (第15・16図 図版8・11~13)

第4層

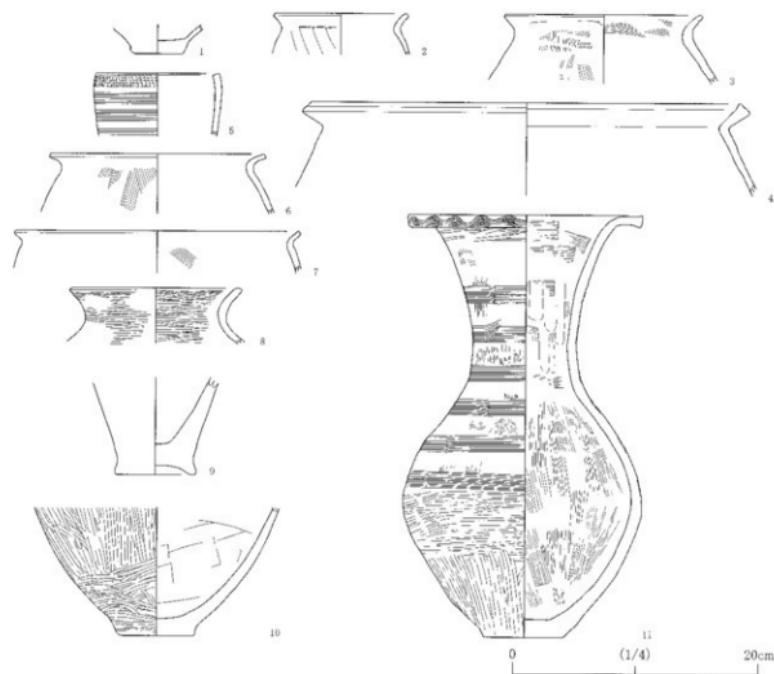
1は、弥生土器の底部である。外面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面には丁寧なナデ調整が認められる。壺の底部と考えられⅢ~Ⅳ様式であろう。

第5層

2は、壺の口縁部である。口縁部は短く外反し端部は丸くおさめる。外面はハケ調整を施し、内面はナデ調整である。Ⅲ様式であろうか。3は、壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけては緩やかに屈曲し、端部は丸くおさめる。外面は、縦方向に細かいハケ調整を施す。Ⅱ様式に位置づけられよう。4は、壺の口縁部である。頸部は「く」の字に屈曲させており、口縁端部は上方へと拡張させる。外面は摩滅が激しく調整は不明で、内面はナデ調整である。Ⅲ様式。

NR001

5は、細頸壺の口縁部である。やや内湾し、端部に明瞭な面を持つ。外面には、簾状文と直線文を



第15図 A地区第4・5層、NP001、SP001出土遺物

めぐらせる。IV様式。6・7は、甕の口縁部である。7は口縁部から頸部にかけては緩やかに屈曲させ、端部は僅かながら上方へと拡張させる。内面はナデが施され、外面は左斜め上方向のハケ調整である。III様式。6は、頸部から口縁部にかけては大きく外反させ、端部は丸くおさめる。外面は縦方向のハケ調整を行っており、内面はナデ調整を施す。II様式。

SP001

8は、広口壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。内外面ともに密に横方向のヘラミガキを施す。II様式であろう。9・10は、甕の底部である。9は、底部から体部にかけて直線的に伸び、内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。III～IV様式。10は、外面はヘラミガキを施し、内面はハケメを施したのち丁寧なナデ調整によって、ハケメが消される。III～IV様式。11は、広口壺である。いわゆるラッパ状に聞く頸部を持ち、口縁端部を上下方向にやや拡張させる。口縁端部には波状文を施し、頸部以下には直線文がめぐる。III様式。

SD001

12は、壺の口縁部である。器壁は薄く、口縁部は外方へと開く。口縁端部を上方へと肥厚させる。端面には刺突文を施し、下端を刻む。IV様式か。13は、長頸壺の口縁部である。外反する口縁部は、端部を上方へと拡張させ、下方へ長く垂下させる。口縁部端面には波状文を施す。III～II様式。14は、広口壺の口縁部である。直線的に外方へと伸び、口縁部で外反させる。端部は下方へと垂下させる。口縁部端面には、簾状文が施される。外面は摩滅により調整は不明で、内面はナデ調整である。IV～I様式。15は、長頸壺の口縁部である。緩やかに外反させたのち、端部を下方へと垂下させる。端面には簾状文を施し、下端部を刻む。IV～I様式。16は、壺の口縁部である。頸部は内傾気味に立ち上がり、口縁部を外反させる。端部は下方へと垂下させる。外面はヘラミガキ調整で、内面はハケ後ヘラミガキを施す。端面に波状文、内面に扇形文を施す。III～IV～I様式。

17～22は、甕の口縁部である。17は、口縁部は外方へと屈曲させ、端部を上方へと僅かに肥厚させる。内外面ともにナデ調整を施す。III様式。18の口縁部は外方へと伸び、端部は上の方に肥厚させる。III様式。19は、緩やかに外反し、端部に面を持つ。外面はハケ調整を施し、内面はナデ調整である。III様式か。21は、頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲させる。口縁端部は、上方へ拡張させ、下方へと肥厚させる。上方への拡張が大きく、やや内湾気味となる。IV様式。20は、頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲させ、端部は下方へと肥厚させる。端部断面は三角形を呈する。外面調整はヘラミガキと考えられるが明瞭ではなく、内面はヘラミガキが認められる。III様式。22は、頸部から口縁部にかけては「く」の字に屈曲させ、口縁端部は、上方へ拡張させ、下方へと肥厚させる。上方への拡張が大きく、やや内湾気味となる。外面はヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。IV様式。23は、高杯の口縁部である。楕円形の杯部で、口縁部は粘土を折り返し、下方へと肥厚させ、上部に明瞭な面を持つ。IV様式か。24は、高杯の脚部である。端部に向かって緩やかに外反させる。外面は縦方向のヘラミガキを施す。IV様式か。25は、高杯の脚部である。脚柱は柱状化しており、裾部端面は緩やかではあるが上方へと拡張させる。外面は縦方向のヘラミガキを施す。IV様式前半。

SD004

26は、壺の底部である。外面はわずかにヘラミガキが認められ、内面はハケ調整のちナデ調整を施す。IV様式前半。

SP002

27は、縄文上器深鉢である。底部は凹底である。肩部は大きく張り内湾する。口縁部は緩やかに外反し、上端部に面を持つ。体部と口縁部との境は明瞭で稜を持ち、調整も異なる。体部はケズリを施

したのちミガキ調整を行い、口縁部は丁寧なナデ調整である。内面はナデ調整を行う。滋賀單IV式。

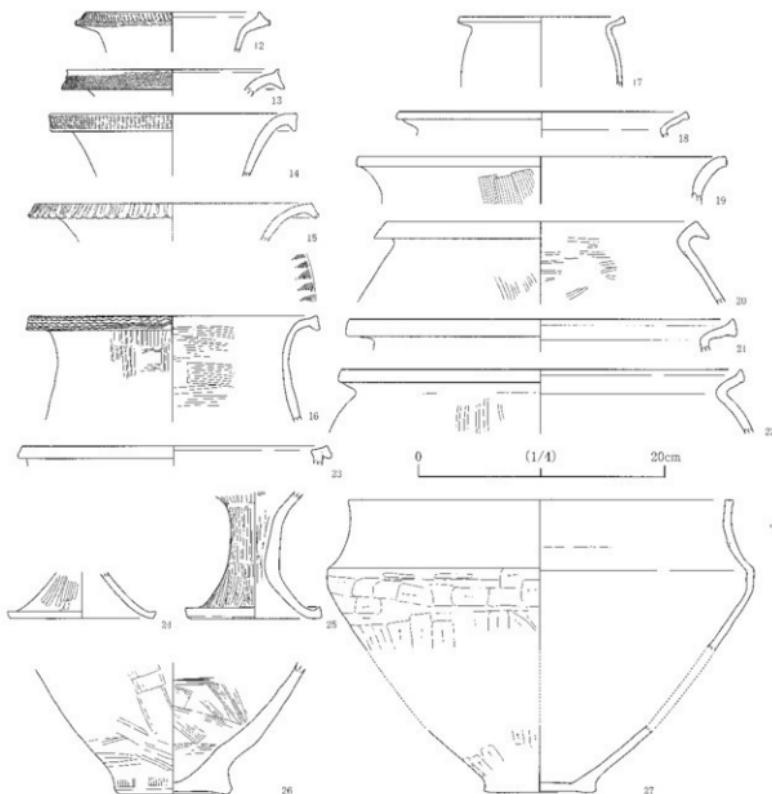
B地区（第17～19図 図版8～10・13～15）

第3層

28は、壺の蓋である。円板状を呈し、2孔1対の孔を穿つ。内外面ともにヘラミガキを施す。IV様式か。

第4層

29は、壺の口縁部である。垂下状口縁を持ち、外面に簾状文がめぐる。IV様式。30は、縄文土器深鉢である。口縁部直下に刻み目を施した凸帯をめぐらせ、口縁端部を刻む。内外面の調整は明瞭ではなく、はっきりとしない。滋賀里IV式。31は、甕の口縁部である。体部から大きく外反させた短い口



第16図 A地区SD001、SD004、SP002出土遺物

縁部を持つ。端部は丸く終わらせる。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。II様式か。32は、甕の口縁部である。大きく外反させ、端部を緩やかに下方へ拡張させる。内外面ともに摩滅がみられ、調整は判然としない。II様式。33は、甕の口縁部である。口縁端部に刻目を施し、体部に3条の沈線と貼り付け突帯をめぐらせる。I—3・4様式。34は、把手付鉢の底部である。外面調整は縦方向のヘラミガキである。IV様式前半。35は、甕の底部である。外面調整は、縦方向のヘラミガキを密に施す。時期については判然としないが、中期後半であろう。36は、甕の底部である。外面調整は、縦方向のヘラミガキを密に施す。IV様式か。

第5層

37は、壺の底部である。外面にハケ調整を施し、内面はナデ調整である。胎土には砂粒が多く、白色を呈する。砂粒に角閃石・輝石を含まないことから、他地域産の土器と考えられる。IV様式であろう。38は、壺の体部である。肩部にあたる粗体で、外面には廉状文がめぐる。廉状文の中に刺突が認められる。IV様式前半。39は、壺の底部である。外面はハケ調整を施したのち、縦方向にミガキ調整を行う。内面はハケメ調整である。IV様式前半。

SK005

40は、高杯の脚部である。柱状を呈し、裾に向かって緩やかに広がる。端部をつまみ上げ、下方へも肥厚させ端面を形成する。外面は縦方向のミガキで、内面はヘラケズリを行う。杯部に穿孔が施される。IV—3様式。

SD009

41は、壺の口縁部である。外方へと屈曲させ、端部を下方へと垂下させる。内外面ともにハケ調整だが内面はあまり明瞭ではない。IV様式前半。42は、壺の底部である。外面調整はヘラミガキを施す。IV様式。43は、鉢である。橢型を呈し、外面はハケ調整ののちナデを施す。III~IV様式。44は、広口壺である。頸部を直立させ、口縁部は外反させる。端部は上下に拡張させ、端面に波状文を施す。外面には、直線文と波状文が組合わされた文様が配置される。内面にはナデ調整とヘラミガキが施される。III—1様式。45は、直口壺である。頸部の屈曲は緩やかで口縁部はやや開きながら端部へと伸びる。端部はやや鋭くおさめる。体部外面にはハケ調整が残り、スヌの付着が認められる。内面は頸部から口縁部にかけてナデ調整が施される。図示していないが、体部に穿孔が認められる。布留2式。

SD005

46は、縦文土器深鉢の口縁部である。端部を丸く仕上げ、直下に無刻の凸帯をめぐらせる。内外面ともにナデ調整である。滋賀里IV式。47は、甕の口縁部である。口縁端部に刻目を施し、体部に6条の沈線をめぐらせる。I—3~4様式。

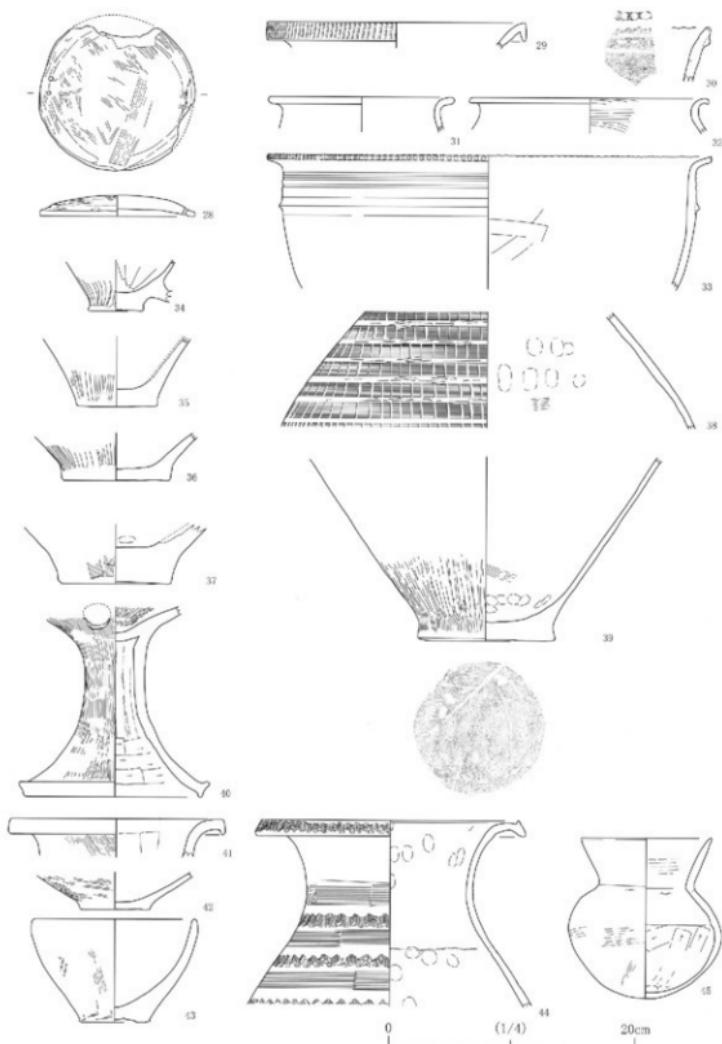
SD001

48は、広口壺の口縁部である。大きく外反させたのち、平坦面を持つ。端部は僅かに下方へと垂下させる。II様式か。49は、甕の口縁部である。口縁端部に刻目を施し、体部に3条の沈線と貼り付け突帯をめぐらせる。I—3~4様式。50は、長頸壺の口縁部である。口縁部を垂下させ、端部に面を持つ。端面には波状文、頸部には直線文と廉状文がめぐる。内面にハケ調整を施す。IV—1様式。51は、壺または甕の底部である。外面は摩滅のため調整は不明で、内面はナデ調整である。III~IV様式であろう。52は、高杯の脚部である。裾に向かって緩やかに広がる。端部での上方への拡張は僅かで、端部に面を形成する。外面は縦方向のミガキで、内面はヘラケズリを行う。端部にはスヌの付着が認められる。蓋として転用されたのである。IV—3様式。53は、大型の広口壺である。体部は下膨れとなり、底部と体部の境が下位にある。体部上半は廉状文を施し、下半はミガキ調整である。内面は

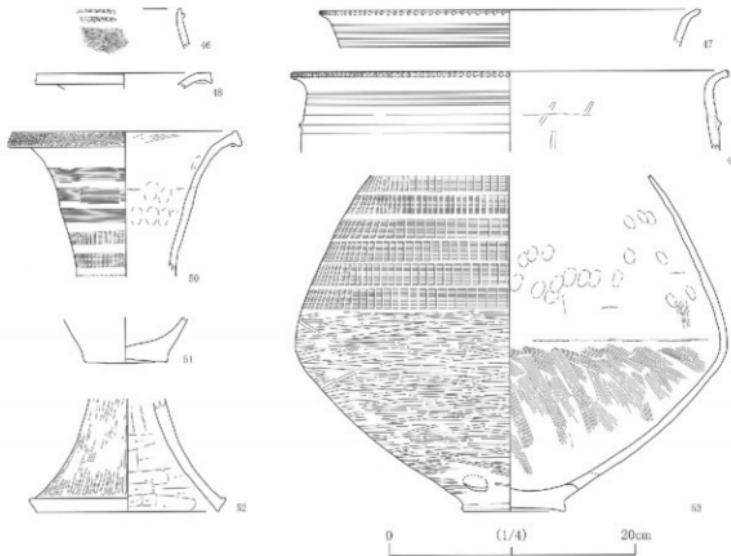
底部付近にハケ調整の痕が残るが、他はナデ調整によって消されている。IV—3 様式。

SD007

54は、広口壺の口縁部である。口縁端部を下方へと拡張させ、刻み目を施す。端面には波状文がめ



第17図 B地区3、4、5層、SK005、SD009出土遺物

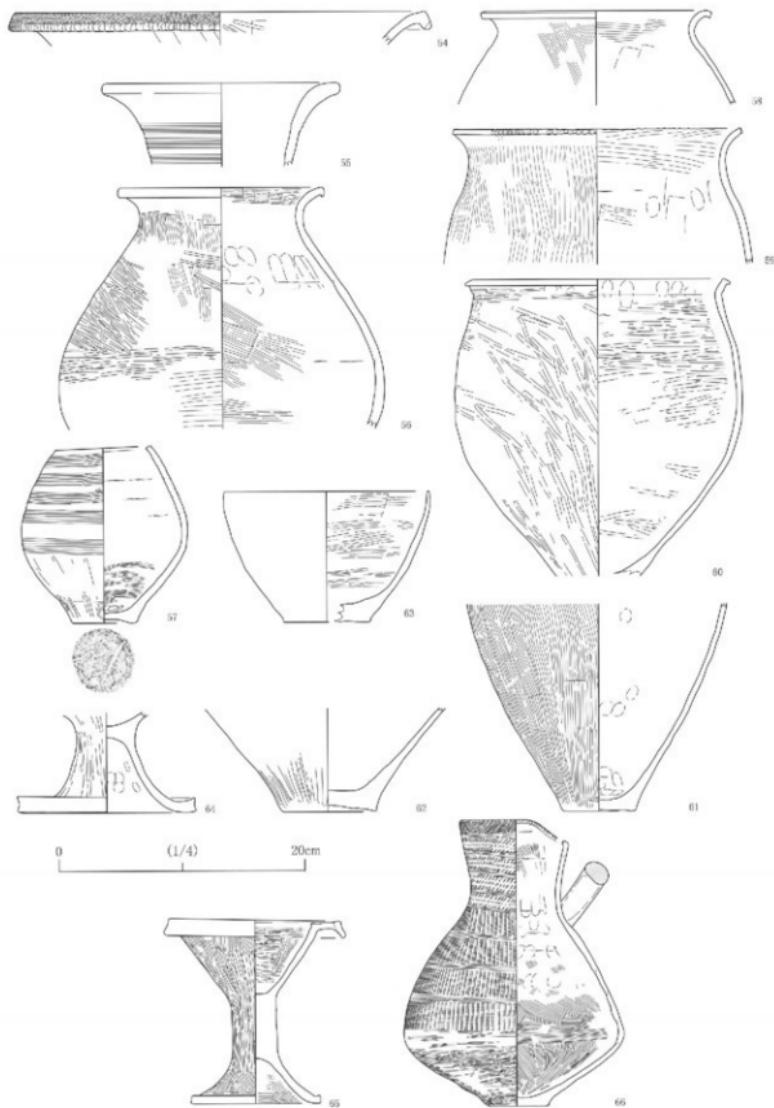


第18図 B地区SD005、SD001出土遺物

ぐる。Ⅲ様式。55は、壺の口縁部である。口縁部は外反させ、端部を丸くおさめる。外面は直線文がめぐる。Ⅱ様式。56は、広口壺の口縁部である。頸部は太く短い形を呈し、口縁端部は僅かに下方へと肥厚させ、上方にも若干の拡張が認められる。外面は、左斜め上方に向へラミガキを施し、内面はナデ調整である。Ⅲ様式。57は、無頸壺である。内湾する口縁部を持つ。最大径は、体部のやや下方で、外面には直線文がめぐる。内面は、底部にハケ調整が残り、その他はナデ調整を施す。Ⅱ～Ⅲ様式。58は、甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部は下方へと垂下させる。内外面ともにハケ調整が残る。Ⅲ様式。59は、大和型甕である。口縁部はゆるく外反し、端部の上端に刻み目を持つ。外面は、縦方向に粗いハケ調整を施し、内面は口縁部に横方向の粗いハケ調整を行う。Ⅲ様式。60は、壺である。口縁部は僅かに外方へと開き、端部は上下方向に拡張させ、面を持たせる。内外面ともにへラミガキである。Ⅳ様式。61は、甕である。器壁は薄く、外面はハケ調整を施す。Ⅳ様式前半。62は、甕の底部である。底部から体部にかけて直線的に伸びる。外面は縦方向のハケ調整を行う。内面は摩滅のため調整は不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。63は、鉢である。外面は摩滅しており調整は明瞭ではないが、端部はナデ調整による。また、内面にはハケ調整である。Ⅳ様式前半。64は、脚部である。「ハ」の字状に開いたのち、水平に外方へと伸ばす。裾部端面は上方へ鋭く拡張させる。外面はへラミガキと考えられるがあまり明瞭ではない。内面はナデ調整である。Ⅱ～Ⅲ様式か。

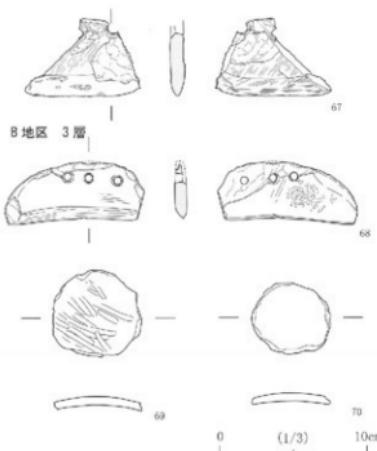
SD011

66は、水差形土器である。体部の張りはゆるく丸みを帯びる。外面には幅の広い簾状文がめぐり、内面はハケ調整である。Ⅳ～Ⅲ様式。67は、水平口縁の高杯である。脚柱は中実で、裾部端面は若干上方へと拡張させる。外面は、ハケ調整を施し、脚柱部にのみへラミガキを施す。内面は、脚部でハ



第19図 B地区SD007、SD011出土遺物

A地区 5層



第20図 A・B地区出土石器・土製品

ケ調整、杯部はヘラミガキである。IV—2様式。

石器・土製品（第20図 図版15）

67・68は、石庖丁である。67は外湾型で刃部に細かな敲打痕が無数に残る。欠損しているが穿孔部分は2ヶ所認められる。粘板岩製。68は内湾型で、刃部に横方向の細かな擦痕が認められる。結晶片岩製。

69・70は、土製円板である。69の表面はヘラミガキ、裏面はナデ調整が施される。70は、裏面ともにナデ調整である。

67はA地区第5層、68～70はB地区第3層からの出土である。

表1 鬼虎川遺跡の調査成果

次数	調査原因	実施期間	調査面積 m ²	調査地	調査成果	報告書	
60	一般国道170号西石切立体交差事業	平成16年6月5日～11月29日	100	宝町1530-1, 1666-8	弥生時代の大溝・貝塚・土坑・ピット群、古代以降の溝・土坑・足跡	市教委	『一般国道西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第58・60次発掘調査報告』 2006
61	一般国道170号西石切立体交差事業	平成16年12月24日～平成17年1月17日	36.8	弥生町、宝町地内	遺物包含層	市教委	『一般国道西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第58・60次発掘調査報告』 2006
62	一般国道170号西石切立体交差事業	平成18年6月7日～11月10日	100	弥生町1371-3・4	弥生時代の大溝・貝塚・土坑・ピット群、古代以降の溝・土坑・足跡	市教委	『一般国道西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第62・63次発掘調査報告』 2008
63	一般国道170号西石切立体交差事業	平成18年10月31日～11月21日	30	西石切町5丁目1-190-8	遺物包含層	市教委	『一般国道西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第62・63次発掘調査報告』 2008
64	送水管路設置工事	平成19年12月25日～平成20年8月18日	458	西石切町7丁目1、弥生町17、宝町23	遺物包含層	市教委	『送水管路設置工事に伴う鬼虎川遺跡第64次発掘調査報告』 2009
65	欠番						
66	公共下水道管渠整備工事	平成19年3月15日～6月12日	149	宝町1653	遺物包含層	市教委	『東大阪市下水道事業関係発掘調査報告書－平成19年度－』 2008

※第1～51次調査については『一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告』参照
※第54・55・59次調査については『一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第56次発掘調査報告』参照

V まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期のピット、弥生時代中期中葉～後葉の溝、土坑、ピット、自然河川を検出した。ただ、造構を検出した面と帰属する面が対応しておらず、やや煩雑な記載内容となってしまった。そこで、最後に各造構の所属面についてまとめておきたい。

第3層上面

A・B地区とともに造構面として検出していないが、A地区東壁でピットや土坑を検出している。また、B地区SD006がこの面に帰属する。おそらく他にも耕作に伴う造構があったと考えられる。

第4層上面（第I面）

A・B地区で第II面として検出した造構は、SD006・SP002を除いてすべて第I面に帰属するものである。

第4層下面（第II面）

SP002がこの面に帰属する可能性が高い。

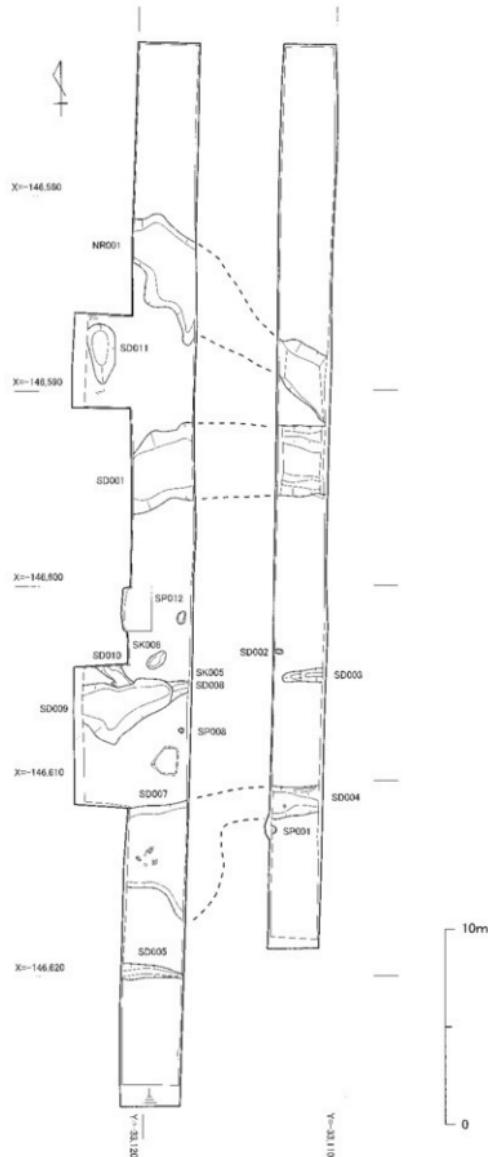
以上のように、今回の調査は第21図のようにそのほとんどが第4層上面において営まれた生活痕跡を検出したものである。出土遺物の多くが弥生時代中期後半におさまるものであり、集中的に造構が形成された様相と合致する。

本調査区よりも北側に位置する第59次調査（東大阪市教育委員会2005）では、南側において南北に走行するSD101を検出している。中期後半の遺物が出土しており、今回の検出した造構と関連するものである。第59次や第50次調査C地区（東大阪市教育委員会2000）といった今回の調査区より北側では遺物が少なく集落などの中心は、さらに東側に位置すると考えられる。西ノ辻遺跡第44次調査（東大阪市教育委員会2008）は、今回の調査の東にあたり調査範囲は狭いながらも、多くの造構を検出しており、この考え方を支持するものである。

また、縄文時代に関してはこれまでにも土器が出土しており、縄文時代に関する情報が断片的ではあるが知られていた。今回、埋設土器と考えられる造構が発見されたことによってその一端を垣間見ることができた。上器の特徴から晩期後葉に属するものである。第59次調査、南側で実施された第50次調査B地区においても同時期の土器が出土しており、周辺が縄文時代晩期後葉の集落が広がっていた可能性がある。

【参考文献】

- 寺沢 真・森井貞雄1989『河内地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社
- 杉木厚典2003『河内地域』『古墳出現期の土師器と年代』財団法人大阪府文化財センター
- 東大阪市教育委員会2000『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—平成11年度—』
- 東大阪市教育委員会2005『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成16年度—』
- 東大阪市教育委員会2008『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成19年度—』



第21図 第Ⅰ面造構平面図

図版

図版1 鬼虎川遺跡第67次発掘調査 遺構



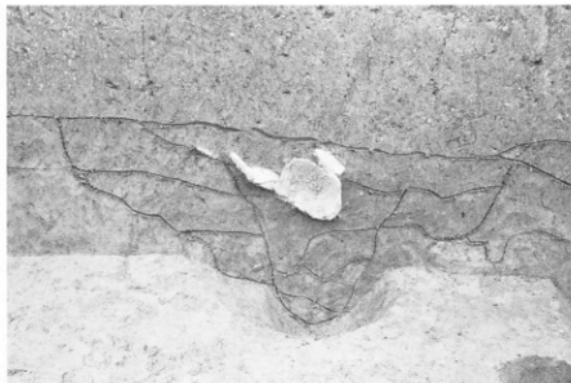
1. A地区第II面全景
(南より)



2. A地区西壁断面
(南西より)



3. A地区NR001
(西より)



1. A地区SP001断面
(東より)



2. A地区SP002・SP003
(北より)



3. A地区SD001
(西より)

図版3
鬼虎川遺跡第67次発掘調査

遺構

1. A地区SD002
(西より)



2. A地区SD003
(西より)



3. A地区SD004
(北より)

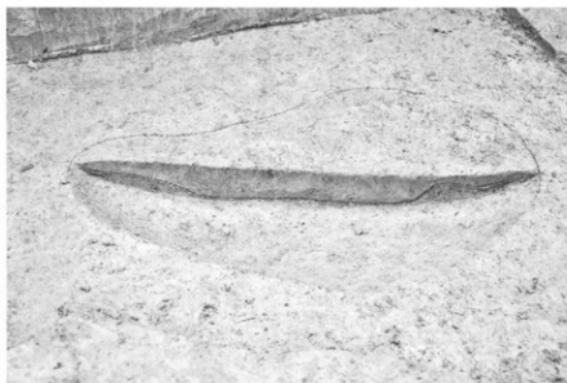




1. B地区第I面全景
(北より)

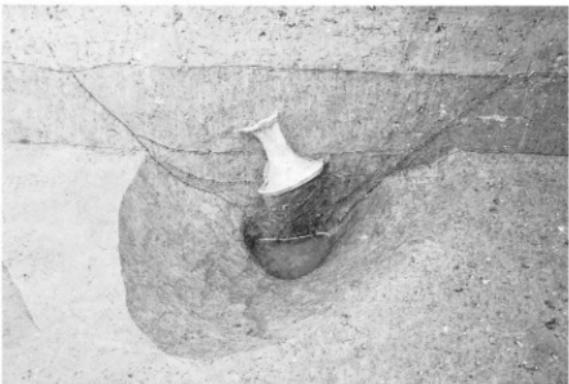


2. B地区第I面SP008
(西より)



3. B地区第I面SP012
(西より)

1. B地区第I面SK005
(西より)



2. B地区第I面SK006
(南東より)



3. B地区第II面全景
(北より)



図版 6 鬼虎川遺跡第67次発掘調査



1. B地区第I面SD007
(北より)

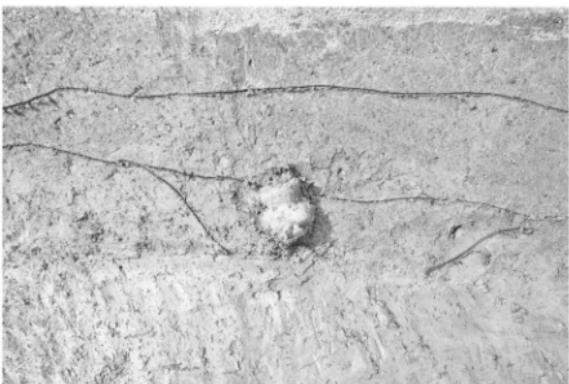


2. B地区第II面SD009
(東より)



3. B地区第II面SD009
動物遺体
(東より)

1. B地区第II面SD009
遺物出土状況
(東より)



2. B地区第II面SD011
(東より)



3. B地区北壁3
(南より)



図版 8

鬼虎川遺跡第67次発掘調査

遺物



11



28



25



26



40



45



43

A地区 SP001 壺・甕、SD002 瓢、SD001 高杯、B地区 第3層蓋、SD009 高杯・鉢・古式土師器壺



59



56



64



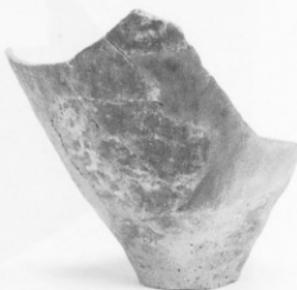
57



62



63



61

B地区 SD007 壺・甕・高杯・鉢



51



60



66



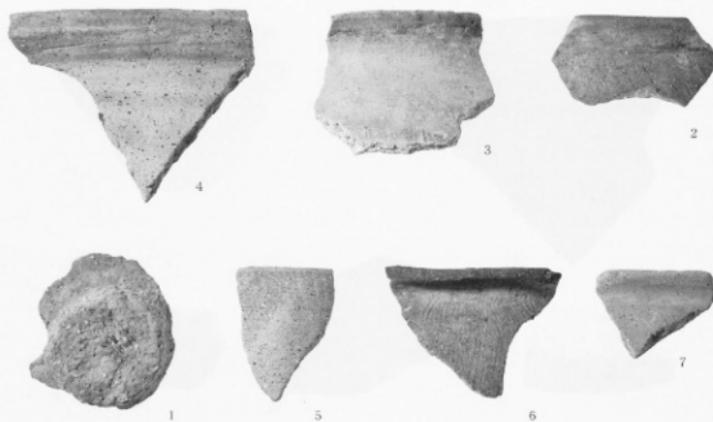
65



53

B地区 SD001 壺、SD007 頸、SD011 水差形土器・高杯

鬼虎川遺跡第67次発掘調査
遺物



1. A地区各層位出土壺・甌、NR001 壺

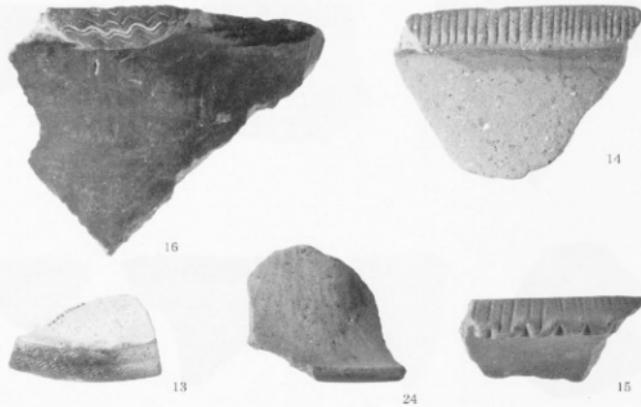


2. A地区NR001 壺、SP001 壺・甌

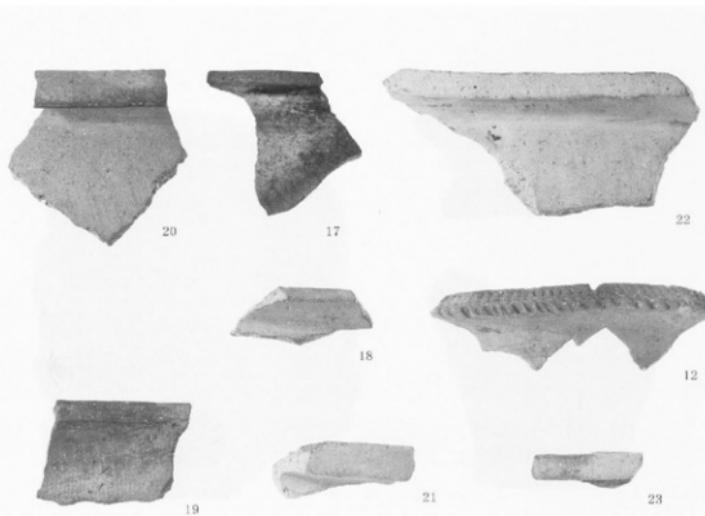
図版 12

鬼虎川遺跡第67次発掘調査

遺物



1. A地区 SD001 壺・高杯

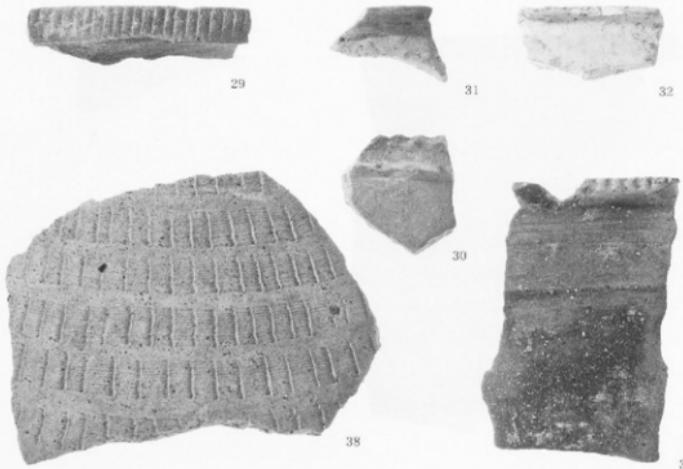


2. A地区 SD001 壺・甌



27

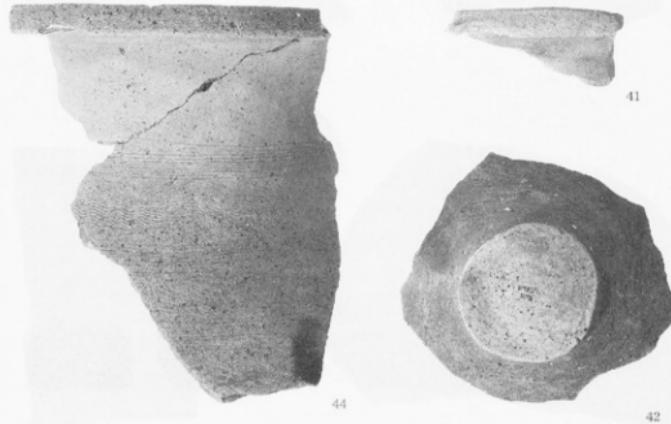
1. B地区 SP002 繩文土器深鉢



2. B地区 第4層出土 壺・甌・繩文土器深鉢



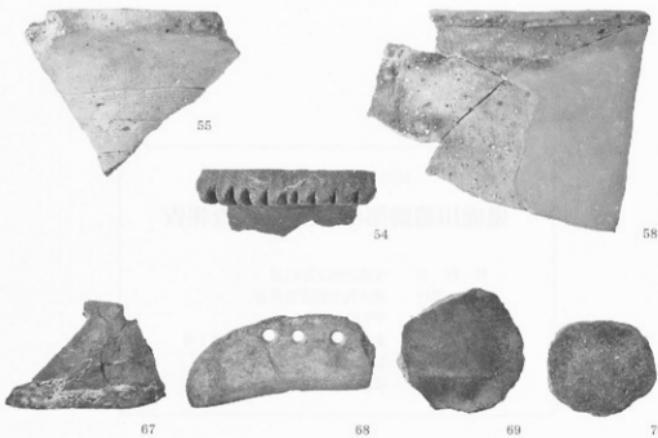
1. B地区 4・5層出土壺・甌



2. B地区 SD009 壺



1. B地区 SD005 壺・甕・高杯、SD001 壺・縄文土器深鉢



2. B地区 SD007 壺・甕、各地区出土石包丁、土製円板

報告書抄録

ふりがな	きとらがわいせきだい67じはくつちょうさほうこく					
書名	鬼虎川遺跡第67次発掘調査報告					
副書名						
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編集者名	菅原 章太・奈良 拓弥					
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号					
発行年月日	2013年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
きとらがわいせき 鬼虎川遺跡	東大阪市弥生町 1399番1、1397番1、1397番2	27227	46	平成24年 2月14日～ 3月17日	381m ²	共同住宅 建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落跡	弥生時代	溝・土坑・ピット・ 自然流路		縄文土器・弥生 土器・土師器		

共同住宅建設に伴う

鬼虎川遺跡第67次発掘調査報告

発行日	平成25年3月31日
編集・発行	東大阪市教育委員会
	〒577-8521
	東大阪市荒本北一丁目1番1号
	TEL 06-4309-3283
印刷所	グランド印刷株式会社

